浄土教における善導の研究

山崎真純

目次

序論
一、目的
二、研究方法
本論
第一章　中国の「往生伝類」からみる善導像
第一節　善導伝の史料
第二節　善導捨身往生説
第三節　善導二人説
第四節　「善導後身」と「後善導」
第二章　唐中期の教学書からみる善導の影響
第一節　懐感『釈浄土群疑論』
第二節　法照『浄土五会念仏略法事儀讃』と『浄土五会念仏誦経観行儀』
第三節　飛錫『念仏三昧宝王論』
第三章　五部九巻以外の著作
第一節　『念仏鏡』
第二節　『臨終正念訣』
第三節　「勧化偈」と「浄業専雑二修」
第四章　宋代の教学書からみる善導の影響
第一節　知礼『観無量寿経疏妙宗鈔』
第二節　遵式『往生浄土懺願儀』と『往生浄土決疑行願二門』
第三節　元照『観経疏』と『阿弥陀経義疏』
第五章　日本浄土教における善導の影響
第一節　日本浄土教の嚆矢
第二節　善導の著作の流伝
第三節　『往生要集』における善導の影響
第四節　『安養集』における善導の影響
結論
参考資料・文献・論文

本論文の目的は、中国浄土教の大成者といわれる善導の思想が、善導以後の中国、ひいては日本においてどのように影響したのかを総合的・体系的に明らかにするものである。

従来、日本における中国浄土教の研究は、曇鸞・道綽・善導を一連の系譜とした教学の研究が進められている。それらは法然・親鸞の理解についての詳細な会通であるといえよう。しかしながら、中国においては全く異なった系譜が見られる。宗暁が著した『楽邦文類』の「蓮社継祖五大法師伝」では、「慧遠―善導―法照―少康―

省常―宗賾」（『大正蔵』巻四七―一九二c一八～一九三c二六）とされ、志磐が著した『仏祖統紀』の「蓮社七祖」では、「慧遠―善導―承遠―法照―少康―延寿―省常」（同四九―二六〇c一九～二四）とする。これらの系譜は、その後、歴代の高僧が加えられて近代にまで至る（戒度『廬山蓮宗宝鑑』等）。中でも注目すべきは、善導が蓮社の第二祖とされていることである。

このように、善導の系譜を見た場合、中国と日本では大きな相違がある。またあくまで『楽邦文類』・『仏祖統紀』は、いわゆる「往生伝類」という伝記上において善導を位置づけたものである。この伝記より前には少康・文諗『往生西方浄土瑞応删伝』より始まり、戒珠『浄土往生伝』、王古『新修往生伝』、遵式『往生西方略伝』等がある。この脈々と続く「往生伝類」の中に『楽邦文類』と『仏祖統紀』も成立しているのであり、「往生伝類」を一線上にして善導の評価を考える必要があるともいえる。

このような「往生伝類」が成立していく一方、善導教学の影響を受けたか否かを検討すべき仏教者も存在する。具体的に言うならば、善導の弟子である懐感はいうまでもないが、「善導後身」といわれる法照や善導の『観経疏』を参照しつつ、『観経』を註釈する知礼や元照等である。つまり彼らは「往生伝類」における善導伝の行跡を交えつつ、善導の思想を感受したのか、それとも、善導の書物からみる思想を如実に受け入れようとしたのかの検討が必要である。

また日本浄土教においても、右の宋代の中国仏教者と同様の趣意と言えるかは改めて検討しなければならない。この問題は善導の書物の流伝と大きく関連するであろうが、法然・親鸞へと続く日本浄土教に何故、善導の思想が強く影響したのであろうか。本論文では、日本において初めて善導の著作を引用した『往生要集』と善導の著作を含めて浄土教関連書物を収集している『安養集』に着目する。後代における善導の影響の変遷を探るとともに、日中浄土教における善導の影響を考察することが本論の目的である。

第一章では、伝記、特に「往生伝類」から見る善導の影響を概観した。岩井大慧氏の論をもとに善導伝所収の「往生伝類」を特定し、その後で善導伝にみる様々な問題を取り扱った。その結果、「伝類」における善導伝を整理し、その中における善導伝の問題について先行研究を整理しつつ、自身の見解を述べた。善導伝は道宣の『続高僧伝』に初出し、その後、数多の「伝類」に善導伝は記載される。しかしその内容は必ずしも一致するものではない。その理由としては各「伝類」を編集した作者の意図によるか、もしくは著者によって新たな史料が発見され増補されたかの二種類に分けられると考えられる。前者は『浄土往生伝』・『往生西方略伝』・王日休『龍舒増広浄土文』、後者は『往生西方浄土瑞応删伝』・『新修往生伝』である。『続高僧伝』では善導の教えを聞いた者が捨身したとする記事を『浄土往生伝』では、善導自身が捨身したと記したため、後代に善導＝捨身往生者と意識づけることとなった。現在の学説では否定されているものの、『善導十徳』にもあるように少なくとも法然はそ

の内容を善導自身の事として考えていたようである。また『往生西方略伝』では善導＝阿弥陀仏の化身とみなした。中国浄土教の発展に貢献した人物として象徴的な存在とみなしていたものであるが、『楽邦文類』・『仏祖統紀』における浄土教第二祖として善導を位置づける基盤を形成したものと考えることができる。そして『龍舒増広浄土文』では善導を己厳な行者として描いている。『往生西方浄土瑞応删伝』は前時代に著された『続高僧伝』と同じにする記事は全く見えず、また『新修往生伝』の善導伝は『浄土往生伝』と内容を同じとするものの、善道伝は『往生西方浄土瑞応删伝』に見える記事も参照しつつ、善導の入寂の様子が描かれている。この二つの伝記に関してどちらも、師の道綽より弟子の善導の優位性を示すことや、善導の二人説という問題を残すことになったが、管見する限り初出の記事も多いことから、新たな史料に基づいて善導伝を著す意図が窺える。いずれにせよ、後代になるにつれて善導という人物が中国浄土教の第二祖として位置づけられるように至ったのは、これらの伝記が基盤となったことは指摘できる。

第二章では、善導の教学的影響をみるため、まずは唐代の仏教者、特に懐感・法照・飛錫のそれぞれの書物との関連をみた。懐感は善導の弟子といわれる人物であるが、その思想的影響は古来より、「十五同十三異」と言われるように、異なる点も多く存在する。それらの先行研究を整理するとともに、善導の教学と『釈浄土群疑論』の関係について述べる。善導と法照の思想的共通点として、「①善導作の讃が最も多く収録されている。②所依の経典はいわゆる「浄土三部経」である。③五会念仏は般舟三昧、称名念仏である」の三点が主に指摘されているが、これらの整理を踏まえて法照と善導の思想的関係について述べた。飛錫は、『念仏三昧宝王論』や『往生浄土伝』を著し、浄土教にも造詣があったとされ、また懐感と繋がりのある千福寺に住していたとの記述もあるので、善導の教学的影響の有無を検討した。また浄土教の他に律や天台の教えにも傾倒していたとされ、宋代にみられる融合思想の先駆けとなった人物と考えられることから、善導と飛錫の関係について述べた。

懐感は、善導の弟子であるにもかかわらず、『弥勒所問経』によって念を理解し、また『阿弥陀経』・『観経』・『般舟三昧経』・『華厳経』などで、念仏の法門を示している。そして念仏を行住坐臥に行い、終には念仏三昧を得るようにと述べる。またそれは法照についても同様で称名念仏を主張するものの、それは結局、般舟三昧へと結びつけていくための導入であり、決して称名念仏一行のみを重視しているわけではない。つまり法照は、浄土教を最要なりとする善導の思想のみを継承したわけではなく、諸宗における円融教義を用いて、融和強調していったといえる。それは飛錫にも同様のことがいえる。飛錫は懐感・法照の説に拠って、高声念仏・五会念仏を取り上げ念仏三昧の重視を説く。また諸宗からの批判を受け、浄土教の立場からその自説を述べるものの、結局は諸宗の立場から浄土教をどのように理解すべきかという点に終着しているといえる。つま

り、この三師は直接その教説を受けたということは管見する限り、伝記の中に見ることはできないが、何らかの関連性は窺えるのである。このように三師においては、善導の思想の影響が多少見受けられるものの、それは諸宗の教義との会通で、浄土教をどのように解釈するのか。その際に思想基盤となって用いたのが善導の思想ではないかと考えられる。とはいえこの諸宗双修の浄土教を真っ向から批判することはできず、時代に順応した一形態ともいえる。

第三章では、善導の五部九巻といわれる著作と他に善導が作ったとされる文にある思想について比較・考察した。現在は、周知のごとく善導の書物は良忠より五部九巻といわれ、『観経疏』は解義分、『観念法門』・『般舟讃』・『法事讃』・『往生礼讃』は行儀分と類別され善導の思想を理解するための大きな二本柱とみなされている。しかし中国においては、必ずしもそうではなかった。柴田泰氏の指摘通りであるならば、善導が入寂して以降、かなり早い時代にその著作は散佚してしまい、後代の中国仏教者は『観経疏』「玄義分」・『往生礼讃』しか見ることができなかったとされる。それらは柴田泰氏によって諸師の著作における善導の引文を確認された結果であるが、どちらにせよ五部九巻の内、後代の中国仏教者によって重視されたのはこの二巻だけであるといえる。また中国において、善導の思想を鑑みるにあたり、それらだけの文ではなかった。『念仏鏡』や『臨終正念訣』、「勧化偈」や「浄業専雑二修」なるものも善導が作ったとみなされていた。「浄業専雑二修」は多少の文字の相異はあるものの『往生礼讃』の抜粋であり、「勧化偈」はこの世を厭い念仏によって阿弥陀仏の浄土に往生することを勧める内容であるため、善導が作ったどうかは検討の余地があるが、いわゆる善導の思想と異なる所がないように思われる。しかし『念仏鏡』や『臨終正念訣』の内容は善導の思想と相似はするものの、全てが善導の思想と一致するものであると見なすことはできない。とはいえ、中国においてはこれらも善導の著作とみなされ、後代の「伝類」においてはそれらを善導の著作として紹介していることは事実である。これらはどのように理解すべきなのか。それは、後代において善導の評価が高まるにあたり、思想面からの補強があったのではないだろうか。つまり、『往生西方浄土瑞応剛伝』の中で師の道綽よりも善導は先に三昧発得を行ったことや『浄土往生伝』の中で善導は捨身往生を行っていると記載されている。その事が、後代に評価されていくにあたって、行者としての善導だけではなく、加えて思想としてもそれらの性格と合致するものを、ということで作られたのではないかと考える。これらは推測の域を出ないが、善導が入寂して数百年経った後に、善導の書物として世に出てきたことを見るに、その説も否定できない。何にせよ、五部九巻といわれる著作より、中国における善導像を理解するのには無理があり、『観経疏』「玄義分」・『往生礼讃』に追加して、『念仏鏡』・『臨終正念訣』・「勧化偈」・「浄業専雑二修」というものから改めて善導像を問い直す必要があるのではないかと考える。

第四章では、宋代の諸師における善導の影響を考察した。その中でも特に善導の思想と共通点のある三師を取り上げた。どの師も善導からは約三〇〇～四〇〇年ほどの経過となるにも拘らず、思想の影響を見ることができた。元照は、善導の『観経疏』を多く参照したことが知られた。また、「念」と「称」を同義語とし、この註釈は、他の『観経』の註釈書には見られないものである。『阿弥陀経義疏』に関しては、善導の引文は二箇所しかないが、やはり称名念仏を重要視したという点からいえば、善導の影響はここでも受けていたといえる。加えて元照は律師といわれる人であり、戒律の中から、元照独自の浄土教との融合思想が看取できる。また善導と同様に遵式は懺悔を重視した人物であるといえる。但し、善導は二種深信に見られるように、自らを罪悪な人間と捉え、痛烈な自己内省をする。遵式もこの点では同様であるが、病や災いなどから逃避をするために懺悔を行い、呪術的な側面が見られる。これは善導の自己内省を含む主体的な懺悔の必要性とは異なるものである。そして「念」についても、西に向かって合掌し、阿弥陀仏の名を一息の中に続けて称名することを「一念」、これを十回繰り返すことを「十念」とした。このように「念」の内実を改めて定義し、修道として示したのである。その点でいえば、元照と同じように、念と称を同義語とした。さらに知礼は天台宗的な思考を取り入れ、『観経』の解釈を確立した。それは、観想を成就するための究極的な観念念仏の思想である。

以上、思想的な影響として、天台思想の中にあって浄土教は注目される。このように善導の影響は多少見受けられるものの、先述したように後代において五部九巻の内、『観経疏』「玄義分」と『往生礼讃』しか残らなかったためか、その思想を踏襲する者がいなかった。唐中期の仏教者と同様に、諸宗の融合思想の中から善導の思想を鑑みた者が存在したのみである。善導は「蓮社二祖」とされるが、宋代における善導像は「般舟三昧の高僧」であり、日本浄土教でいわれる「称名念仏を勧めた仏教者」ではない。それは、浄土教を宋代までに宣揚した諸師の思想を諸宗に融合し、それが唐代の頃に比べて急速化した形となる。これが宋代における善導の影響である。

第五章では、日本における善導の書物の流伝並びにその影響を考察した。善導の書物が日本へ流伝されたのは奈良時代であり、浄土教が日本へ流伝してから間もないころである。しかしそれらの書物は流伝されるものの、全く日の目を見ることがなかった。智光や智環、永超等、浄土教に関心を示した者はいるが、善導の著作にまで目を向けることはなかった。この時点において善導は、他の浄土教者と比べても特化して評価されることのない人物だったといえる。その後、善導の書物を再評価し、その思想を鑑みたのは源信であった。源信は『往生要集』の中で、善導の著作を十数回引用し、また『観経疏』だけではなく、『観念法門』・『往生礼讃』と幅広く取り扱った。師である良源も『極楽浄土九品往生義』という浄土教の書籍を著しているにもかかわらず、善導の書物を全く引用していないの

に対して、源信は善導の影響をかなり受けていたと考えることができる。しかし、その内容は中国仏教で評価されていた善導像から抜け出すことはなく、あくまでも観察や三昧思想の理解にあたり、善導がどのように見ていたかということであった。その後、善導の書物を引用したのは源隆国が編集した『安養集』である。その間は数十年の差があるが、『往生要集』にはない善導の念仏思想や凡夫性の重視が窺える。『安養集』は単なる諸師の文を集めた書物であり、著者自身の意見が述べられているわけではないので、著者が善導に対してどのように影響を受けていたかは不明であるが、少なくとも今までそれらの善導の文を鑑みる者が存在しなかったことに比べると、前進したといえる。

そしてこの後、珍海・永観などによってさらに善導の書物は引用され、それまでの教学書では注目されなかった善導の思想まで注目されるようになり、言うまでもなく法然・親鸞へとその影響は継承されていく。この中で、一貫して説かれるのは「念仏思想の大成者」としての善導ではなく、「般舟三昧の行者」としての善導像である。当初中国における善導の評価は、入寂以後も高くなることはなかった。しかし「伝類」においてその改変された内容と、唐中期以後の浄土教と諸宗の整合性をはかるにあたり、善導のある一面の思想が見直されるようになって、その評価は高くなり、宋代においては「蓮社二祖」と位置づけられるようになったのである。日本においても当初はその評価が変わることなく、あくまでも篤勤精苦の行者である善導は如何なる思想を持っていたかが尋ねられていた段階であったということであろう。